新発田歩兵第百十六聯隊奮戦記

【第１回】聯隊の創設及び上海会戦

元新発田駐屯地援護室　佐藤　和敏

東亜の空に暗雲低迷し、風雲急を告げる日中両国の関係は、昭和十二年七月七日深夜、盧溝橋（北京西南方十キロの氷定河に架かる橋）に谺する一発の銃声により遂に爆発を見るに至り、その後、日中は全面的な戦争に突入した。

新発田歩兵第百十六聯隊は、日中戦争勃発に伴い、特設第十三師団（仙台、荻洲立平中将）の隷下に属し、昭和十二年九月十日編成を命ぜられた。

聯隊は、歩兵第十六聯隊と同郷部隊であり編成担任部隊は歩兵第十六聯隊留守隊（戦時は歩兵第十六聯隊補充大隊、後に歩兵第十六聯隊補充隊と呼ばれた）で、その動員業務は順調に進み、部隊幹部級は九月十二日までに応召して部隊編成準備、その他一般兵も十五日午前九時までに応召を完了し、予定通り九月十九日編成を完結した。編成時に召集された兵員は、大正十三年から昭和八年までの徴集兵で、全員現役を除隊していた。中には満州事変に参加し現役を延期され服した兵もいた。

九月十六日、初代聯隊長　添田孚大佐が宮中において、天皇陛下から勅語とともに軍旗を拝受し「歩兵第百十六聯隊」が誕生した。

同十九日、秋晴れの町裏練兵場において越佐健児四千の将兵全員集合し、軍装検査の後、軍旗拝受の式典が挙行され、聯隊の上下一体和衷共同の基礎を固めた。

同二十六日、添田大佐以下将兵は町民多数の歓送の裡に新発田駅を出発し神戸に集結、九月二十八日、一六〇〇神戸港を出港、十月二日、一六〇〇下船開始、上海に上陸した。

上陸第一夜を平源路附近の廃屋に明かし、途中眼に触れる家屋は一つとして大上海を物語るものなく、荒涼としてただ形骸を残すのみで、第一回敵前上陸部隊の苦心激戦が察せられた。時折飛来する敵飛行機と之を迎撃する我が高射砲、機関銃に加え、江湾方向の銃砲声の殷々たるに一同初陣の武者震いを禁じ得なかった。

歩兵第百十六聯隊は、新発田出征以来終始中支戦線に在り、事変初期の上海戦、南京攻略戦、徐州会戦はもとより、後の長沙作戦、宜昌作戦等々に次ぐ世紀の大陸打通―湘桂作戦では貴州省独山まで進出反転と、威は重慶を圧した。

初戦となった上海附近の戦闘地は、一帯に錯綜した「クリーク」（小運河で灌漑などのため掘られた支流）地帯で、敵はこれを巧みに障害として利用し、鉄条網と相俟って、巧妙に陣地を数線に構成し、陣地の前面には必ず掩蓋機関銃坐からする側面防御の処置が講ぜられていた。之がため「クリーク」を通過して行う突撃は、実に難事中の難事で、常に悪戦苦闘を反復した。

指揮官、兵員とも陣地攻撃は初戦で不馴れだった。さらに糧秣、飲料水の補給も途絶、クリークが最大の障害で、コレラ病患者、下痢患者の発生が続出するなど、戦死者と共に多くの犠牲者を出しての上陸作戦であった。

一般に地形が平坦で遮蔽物が少なく、側防火を以って覆うには好適で、防ぐ者のためには頗る有利であった。

師団正面に現れた敵は、約十二個師団で、我が師団の攻撃によって損害を受けると遂次交代して出現するので、師団としては終始新鋭な敵兵団と交戦した。敵第一線の実兵力は常に三個師団を下らなかった。

聯隊正面の敵第一線は約三千五百、その後方には督戦隊及び学生軍があり、一個師団を下らないようであった。又敵の装備で特に注意すべきは、歩兵重火器就中、軽重機関銃及び迫撃砲の数が多く、軽重機関銃の如きは之を総括的に見るとき、我が正面に於いて十メートル毎に何れか一挺が出現していた。之に対し我が師団は乙武装（三八式歩兵銃・十一年式軽機関銃・三年式機関銃）で之に当たったため戦闘容易ならぬものがあった。

師団は軍（上海派遣軍）の決戦方面に使用される予定の意図を受け、将兵一同光栄ある戦闘に参加し得ることを喜び、大いに士気振るい、その準備に邁進していたところ、情勢一変し、師団は第九師団（金沢現役兵団）と交代し、助攻方面に使用されることとなり、十月七日以来遂次第一線に兵力を注入する事になって、我が聯隊（第一大隊、第八、第九中隊、歩兵砲隊欠）は、十月二十一日、戴家宅の敵陣地、孟家宅・清水廟の奪取を命ぜられ、午後六時集結地を出発、第二大隊（第八中隊欠）を右第一線とし孟家宅を、第三大隊（第九中隊三分の一、第十二中隊欠）を左第一線とし、主として清水廟の攻撃を準備する如く命じた。

かくして、聯隊各隊は前進を起したが、敵は夜間地域射撃を以って我が前進を阻止し、午後七時頃その射撃は猛烈を極め、迫撃砲及び小銃の集中射撃を受け、加えるに「クリーク」に阻まれ前進意の如くならず、更に距離間隔を開くの止むなきに至った。

地上にある物に手を出せば手に、エンピを出せばエンピの柄に銃弾が貫通し、ただ壕の屈開により各隊は前進を敢行、文字通りモグラ戦術にて陣地を推進、二十二日朝までには準備を完了し、まさに攻撃前進に移らんとする時「師団右翼隊方面に敵の逆襲あり、その

一部は師団司令部附近に進入し来り、歩五十八の如きは全滅したとの報」に接し、師団長は我が聯隊に「一部を現在地に残置し主力を以って師団司令部附近に来れ」と意外の命令を受領した。

聯隊は不満ながら攻撃を中止、一部を現在地に残置し主力を以って転進行動を開始した。

然るに敵の逆襲は忽ち撃退され歩五十八の全滅は虚報であったことが判明し、聯隊は再び前任務を続行する如く命ぜられた。

二十三日より、重砲、山砲、飛行機等の協力を得て攻撃に着手したが、容易に之を奪取し得ず、殊に右聯隊正面の老陸宅陣地（隣接部隊の攻撃目標）より側射、背射を受け苦戦におち入った。

左翼第三大隊長・辻少佐をはじめ、各中隊長、小隊長が戦死及び負傷し、翌払暁、朝霧を利用して、清水顧に対し突撃を敢行した交代大隊長代理・佐々木中尉も軍刀を握ったまま敵の陣中で戦死し、その他下士官兵の損害も莫大であった。

前線部隊は壕を掘りながら前進中で、部隊への弾薬補給は一面の綿畑の中を匍前進して壕にたどり着く意外方法がなく、之も決死の任務であった。自己防衛の手榴弾二個を保持し、小銃弾百八十発包装四個を両肩に、たすきがけして補給した。

敵は綿の木が動くと、軽重機関銃で一斉射撃を浴びせた後、決まり文句のように迫撃砲を三発撃ち込んできた。

又、右翼隊第二大隊長・筒井少佐も負傷、矢崎大尉代わって指揮中、これまた悲壮なる戦死を遂げ死傷続出であった。

而かし第一線の将兵は士気益々旺盛、突撃に突撃を繰返し、第二大隊は二十四日朝孟家宅堅陣を、第三大隊は二十五日午後清水顧の一部を占領した。第三大隊は続いて二十七日完全に占領した。

午後聯隊は、戴家宅附近の戦闘を終わり復帰した第一大隊を第二大隊と交代、清水顧、新陸宅東北側の線を確保し戦力を回復、新陸宅の陣地を攻撃し成果をあげ将に之を奪取せんとしつつあったが、十月三十一日、新任務を受け羅店鎮附近に転進することとなった。

聯隊は上陸以来一ヶ月、連日辛酸苦難に堪え、死を鴻毛の軽きに比し、堅塁を屠り、南翔、嘉定の横をつき、正に新陸宅を奪取して敵の大動脈に尖刀を加えんとする時、急遽軍命令により新任務に就いたのは甚だ遺憾であった。

本戦闘の奮戦激闘の跡を静かに顧みるに、聯隊としては幾多意に充たぬものもあった。

一兵の虚報と一時的第一線の状況不明により聯隊が無益の行動を命ぜられ、疲労と損害を増し、老陸宅を隣接部隊が奪取せざるに奪取したとして、清水顧、新陸宅を攻撃し機関銃の側背射を受けしが如くは、砲爆撃は弾薬少なく効果甚だ不充分なりし等である。

而しながら将兵は、時局の重大性に鑑み最善の努力を払い、敵の重要堅固な陣地を力攻し、主攻撃方面の成功に貢献し輝かしくその任務を完了した。之を以って戦没勇士の英霊に対し若干なりとも慰め得たものと確信している。

この間に於ける我が損害は、戦死第三大隊長辻少佐、第二大隊長代理矢崎大尉を始め三百九十名（内将校十七）負傷五百九十二名（内将校十九）で甚だ無念とするところであった。而しながら敵に与えた損傷も多く、遺棄屍体のみで約千五百、之によって察するに全損傷は数千と推定された。

（参考文献「新発田聯隊史」「聯隊歴史　歩兵第百十六聯隊」より）